



photo by Julien Bourgeois

特集

クロード・レジ演出

『夢と錯乱』Rêve et Folie

— 2P-5P

ホワイエ

— 6P-7P

5～7月公演スケジュール

— 8P-9P

藤間勘十郎文芸シリーズ 其の三

一部『恐怖時代』／二部『多神教』 — T・2P-T・5P

鼓童 特別公演 2018「道」

— T・6P-T・7P



photo by Pascal Victor

## 『夢と錯乱』 Rêve et Folie

2018年5月5日(土)・6日(日) 15:00

会場：春秋座 特設客席

作：ゲオルク・トラークル

仏語訳：ジャン＝クロード・シュネデル、  
マルク・プティ（ガリマール社）

演出：クロード・レジ

出演：ヤン・ブードー

初演：ナンテール＝アマンディエ劇場、2016年9月15日

主催：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

製作：アトリエ・コンタンポラン

協力：SPAC- 静岡県舞台芸術センター

助成：アンスティチュ・フランセ

フランス演劇界において、もっとも正統的かつ過激な演出家であるクロード・レジの、《最後》の作品。

オーストリアの夭折の詩人、ゲオルク・トラークルの描く自伝的エクリチュールが、徹底的なテキスト探求によって、禁欲的で硬質な舞台表象として現れる。

●公演情報の詳細はスケジュール一覧（P.8）をご覧ください。

# フランス演劇界の巨匠、クロード・レジ

## 8年ぶりの関西公演!!

### 詩人、ゲオルク・トラークルについて

抱擁のうちに石と化した2匹の狼が  
互いの血を交わらす

ゲオルク・トラークル

これはもちろんトラークルの妹と彼自身のことである。2匹の非常に若き狼。

トラークルは、“近親相姦”という言葉  
を直接使うことは決してしな  
かった。

近親相姦の妄想は何度も繰り返執  
拗に彼を襲った。

トラークルはその泥沼の中で綴って  
いる。

黒い小舟の上  
向こう岸へ  
恋人たちは消え去った

この詩句を読み、声で発するとき、  
余韻がはっきりと残るように少しの  
間をおかねばならない。黒い小舟、  
舟の黒さの残す余韻…

“向こう岸”はあの世をも意味する  
し、“恋人たちは消え去った”から  
は死と近親相姦の愛の距離が近いこ  
とを感じさせる。

これらの詩句は“見せるため感じさ  
せるため”に書かれたものである。  
それはそこにある言葉自身を超えて  
いく。

詩句の一行一行がいかに沈黙の中  
で余韻として響き渡るか、それを聞き  
取ってほしい。

これらは他のものにも使われるごく  
普通の言葉である——黒い小舟は必  
ずしも死のボートを意味するわけ  
はない——しかしこれらの言葉の寄

せ集めが、これらの言葉の結びつき  
が、簡潔さ、凝縮そして音の並びが、  
私たちの内にあるあらゆる類の感情  
を爆発させる。それは、そこにある  
言葉の表現をはるかに超え、言葉の  
数をはるかに超え、単なる言葉の持  
つ意味をはるかに超えていくので  
ある。

神経を引き裂かれるような激しい心  
の痛み。

この心の深い動揺こそは、詩が呼び  
起こさねばならないものである。

そしてこの深い傷が残す傷跡こそが、  
表現の向こうにある傷跡なのだ。

クロード・レジ

著書『Du régal pour les vautours』より

### 演出：クロード・レジ

フランスの演出家。1923年生まれ。特定の劇場や劇団に属することなく、独自の  
理念で、主に同時代の作家の作品を上演し続けている。1952年から活動をはじめ、  
初期にはガルシア・ロルカやメーテルリンクなどを演出していたが、1960年代に  
マルグリット・デュラスの作品と出会い、『イギリスの恋人』（マドレーヌ・ルノー  
主演、1969）などを演出。さらに1965年からはピンター、オズボーン、ストッパ  
ードなど英米の作品を手がけ、1970年代以降はナタリー・サロート作品上演の一方  
で、ペーター・ハントケ（ジャンヌ・モロー主演『ボーデン湖の騎行』1974）、ポ  
ート・シュトラウス『再会の三部作』（1980）などのドイツ語圏戯曲の紹介にも勤  
める。メーテルリンクの『内部』（1986）やアンリ・メッシュニック訳の聖書の一部  
をもとにした『賢者の言葉』（1995）では、言葉や声に関する徹底した探求の成  
果が見られた。90年代以降ではノルウェーの現代作家ヨン・フォッセの『だ  
れか、来る』（1999）やサラ・ケイン『4時48分サイコシス』（イザベル・ユ  
ベール主演、2002）などでの刺激的な舞台で話題を集めた。2009年にはフェ  
ルナンド・ペソア作『海の讃歌（オード）』を発表、翌2010年に初来日公  
演として、静岡と京都芸術劇場春秋座にて上演。1981年以降、パリ国立俳  
優学校（コンセルヴァトワール）で教鞭をとり、その著作によっても、多くの  
若い演出家や俳優に影響を与えている。本作『夢と錯乱』は、2016年に93歳  
で演出。クロード・レジ自身、本作は最後の作品になると語っている。



photo by Julien Bourgeois

### 作：ゲオルク・トラークル

1887年ザルツブルグで、裕福な商人の家庭に生まれる。若くして薬剤師として  
働くなかでモルヒネ中毒となり、妹のグ  
レーテと近親相姦の関係にあった。1914  
年にポーランドのグロデック近郊の東部  
戦線で、極めて悲惨な状況下で負傷者  
の治療をしていたときに、コカインの過  
剰服用により27歳で亡くなった。



## クロード・レジ × 渡邊守章 (演出家舞台芸術研究センター主任研究員) トーク (通訳: 多賀茂)

2010年6月、クロード・レジの初来日公演となる『海の讃歌 (オード)』(作: フェルナンド・ペソア/静岡・京都で上演)のポスト・パフォーマンス・トークで、クロード・レジが創作について語った模様をお届けします。

### 無意識を舞台に出現させる——

**渡邊** クロード・レジという方は、60年代から活躍をはじめていらっしゃるのですが、劇団とか劇場に所属しないで、ご自分の仕事を一筋にやって来た。そういう外的な制約がないので、やりたいことをやってきたという言葉が悪いんですけども、禁欲的な芝居を作るのですね。現在86歳でいらっしゃいますが、なんとというすごいエネルギーかと思いました。

**レジ** 私自身は、自分がしていることを理解しているということは、全くありません。私がいつも行うのは本能によって、あるいは直感によってであります。私のこれまでの仕事の中に常に存在してきた二つの大きなテーマがあります。それは、「死」と「狂気」です。私自身、俳優たちと仕事をするとき、無意識というものを表現する努力をしてきました。無意識とは、この世の裏側にあるものであります。それを舞台の上に出現させようと。世界の裏側にあるもの、それはまた世界を超越する、世界の果てにあるものでもあります。

**渡邊** レジさんのように、声というものはどういう風であるべきか、声と言葉はどういう風に関係するのか、この問題を深く考えている方は、珍しいと思います。とくにフランスの演出家では珍しいと思いますが、いかがでしょうか。

### テキストに存在する

#### 「別の言語」——

**レジ** 声とともに、観客、そして私たちは、俳優の身体を同時に見ております。そして、それらを通して私たちは、俳優の魂を見るのです。私がどのように声を扱っているか、声を通してどういう仕事をしているかということですが、それはテキストから、意味の伝達という最初の役割を捨てさせてしまうこと。それを忘れてしまうことです。そうすることで、テキストの下に存在する「別の言語」というものを立ち現わせるのです。その「別の言語」は、音、そしてリズムのおかげで我々が知覚できる言語です。そのようにして扱われたテキストは、まさに演劇のまったく本質的な要素になりうるということです。あらゆる可能な演劇性というものをテキストから一掃していくこと、それが私の仕事であります。そして、そのことによって、私は手で取るように、テキストというものがもっている、あるいはテキストというものが生み出す、真の演劇性というものを出現させることができるかと考えるのです。私が行っていることは、いまでも実験の段階です。私がやってきたことは、常に探求なのです。だからこそ私は、現代の同時代の作家たちを扱ってきました。私は古典的な作家を扱ったことはありません。それは、現代の作家が持つ「エクリチュール」を通して、別の道、新しい道を探すためであります。ところで、先ほどもお話が出ました、私が自分の母体となる劇団、劇場をもたなかったということですが、これまで私になしえたこと、それはまさに私が劇団をもたなかった、

私が自由であったからこそできたといえるでしょう。

**渡邊** いまレジさんの言われたことを、もう一度、簡単に教科書的にまとめおきますと、自分にとって演劇作業の一番大事なことは、テキストだとおっしゃいました。それから、もう一つは、意味というものが一番重要なわけではない。この二つのことは、よく頭においておかないといけないので、テキストだと言う人は、必ずそれは意味だと思うわけですね。で、そのテキストの解釈をするわけですね。解釈をすることが、演出することに繋がる部分はありますけれども、重要なわけではない。レジさんにとって何が重要かと言うと、そこには「別の言語」が隠れているという。その「別の言語」というのは、音だとかリズムだとかそういう、言ってみれば物質的、あるいは肉体的、あるいは感覚的なものによって担われているものだ。つまり、それを掘り起こすというか、照らし出すというか、引き出すというか、それが重要なのだということをおっしゃった。このことは、日本ではものすごくいい加減にされているのですよね。そうではなくて、言葉の音そのものが含んでいる可能性とか、いろいろな意味の「場」とか、世界の広がり方というものを自分はつかまえたんだとおっしゃっている。言葉の中から、普通、言葉といったときには、見落としていってしまうようなものを掘り起こしていく。そもそも、詩というものはそういうものだったのですね。演劇というのは





詩から生まれてくるわけなのですが、その言葉がもっている音とか、それを「身体性」と仮に言ってもいいですけれども、「身体性」とか想像力とかというものを引っ張り出す。そのために、私は、個人的には、日本の伝統演劇の言葉、例えば人形浄瑠璃の文楽の言葉とか、能の言葉とかいうのが役に立つ。ただ、レジさんの場合にはそういうものがフランスにはありませんし、あくまでも現代の作家との対決でそれをなさっている。

#### 翻訳、俳優について——

**レジ** 第一に、詩人の作品、文学作品を扱うときには、翻訳を直しながら作業をはじめます。というのは、外国人作家の作品を扱うことが多いからです。そうすることによって、作家の「エクリチュール」を見つけていくわけです。アンリ・メシヨニック

クという哲学者、言語学者はこんなことを言っていました。翻訳は言語の本質を見極めるための最上の、最良のアトリエであると。第二に、俳優の演技を禁じる、私は俳優が俳優であろうとすること、俳優のフリをすることを禁じてきました。俳優たちがあまりにも観客との安易な出会いを求める。それを私は禁じてきたわけです。私はデュラスの言葉を思い出します。それは、役者一般について、役者というものは、「エクリチュール」を決して助けてはくれないと。彼らは「エクリチュール」を殺してしまっているのだと。非常に辛らつな言葉です。私は、これはひとつの本質を言い当てていると思います。衣装とか舞台装置であるとか、そんなものを私は一切拒否していきます。そして、テキストを演劇の第一の要素としているわけです。これは、演劇の世界において、そして、

演出の方法において、一つの大きな革命です。演劇の様々な常識を大きく変えるものなのです。そして、最後に、私自身は、とにかく他の人が、今までにやったようなこと、それとは別のことをしたい。この道は非常につらくて困難な道ですので、多くの方はそれをすぐやめてしまいます。テキストを演劇の第一の中心的な要素とすること、それはまた俳優を第一に考えるということでもあります。なぜかと言いますと、俳優こそがテキストを舞台の上に出現させ、動かす者なのであります。したがって、私自身の仕事は、俳優に、非常に大きな役割を与えていると言うことができます。したがって、私にとっては、俳優の選択や、俳優との仕事がかつても重要な仕事なのです。だからこそ、これまで多くの場合、私は、一人の俳優による、つまり、ソロでの芝居を好んできたわけなのです。

#### 《関連企画》

## 映像上映会『クロード・レジ：世界の火傷』

*Claude Régy: la brûlure du monde* © LOCAL FILMS 2008

レジ演出作品『ダビデの歌のごとく』*Comme un chant de David* (アンリ・メシヨニック翻訳)の舞台映像と創作について語るレジの映像で構成された、2005年製作映画。収録された舞台映像は、映画のために特別に抜粋され撮影されたものだが、通常、自作を映像に残さないレジ作品を知る貴重な資料。

4月21日(土) 15時スタート 上映時間50分 日本語字幕つき

京都造形芸術大学 映像ホール 入場無料・要事前申込

申込み方法：京都芸術劇場ホームページ <http://k-pac.org/> チケットセンター (平日10-17時 tel.075-791-8240)